

興亞と禪

緒方宗博

一、緒言

現下の世界に於て萬國人の視聽を集注しつゝある問題は少くとも二つあると思考せられる。その一は歐洲に於て第二次大戦争勃發の危機が切迫しつゝある事であり、その二は極東に於て新事態が發生しつゝある事である。前者は暫らく措き、専ら後者に就いて問題の本質を究明し、その根本原理の發見に資し度いと言ふのが本小論の意途する所である。

極東に於ける新事態の發生とは、言ふまでもなく、過去二ケ年餘に渡つて我が日本國が史上空前の大軍を支那大陸に派遣して奮闘努力した結果、現に北支及び中南支に於て建設せられつゝある東亞の新秩序を指すのである。惟ふに今時支那事變を契機として極東に生起しつゝある新事態はその由來する所甚だ遠くその影響する所極めて廣汎且つ重大である。これは但に我が一億國民上下一致の決意に基づいて生起した事實であるばかりでなく、實に亞細亞諸民族全體の渴望を荷つて進展しつゝある所の事象である。而もこの亞細亞諸民族の人口數は優に十億、世界全人口の半數を越ゆる

ものであり、その要望は決して一朝少々の利害や感情問題に發端するものではなく、數十百年の永き歴史と亞細亞全民族の死活問題とに關聯した己むに己まれぬ根據より出發したものである。即ち極東に於ける新事態の發生は單なる偶然的出來事ではなく、實に歴史的必然に依つて展開しつつある所のものである。西洋的なものが地球の全面を闊歩した世界近世史なるものは一應今日を以つてペリオドを打ち、新たに東洋が興起する世界現代史なるものが將に出發せんとしつつあるのが現下世界の動向である。これを我が國史上の出來事と比較するならば、平安朝が終結して鎌倉時代が續起した事象と一脈相通する所があると言ひ得るであらう。即ち平安朝期は文學が文化の首位を占め感情及び才知の陶冶が盛んに行はれた時代であるが、これは西洋中心の近世世界史が科學萬能を以て始終せんとして居るのと相似して居り、兩者は共に現實主義と言ふ一點に於てその揆を一して居るものである。總じて現實主義が謳歌される時代に在つては、人々は官能的な幸福の追求に専念し、國家よりは個人を、道義よりは物質を尊重する傾向に偏するものである。而して社會上に於ては一部少數の特權階級が全體多數の被支配階級の犠牲に於て榮華を極め、從つて上下相爭ふて亂世が出現する事は自然の趨勢である。吾人は平安末期の公家諸公が國民塗炭の苦を餘所に日夜詩歌管絃の樂しみに陶醉してゐた有様と現代一部白人種的生活態度との間に多大の類似點を發見し、又當時世の亂れに際して武士なる階級が興起して意志を鍛鍊し道義を強調して天下を統一し、外敵

元軍十萬の襲來も一舉に之を撃退して國威を内外に輝かした史實と、現下世界動搖の眞只中に在つて我が日本民族が興亞の爲に蹶起し、毅然として邁進し行く姿とを比較對象して轉た感慨なき能はざる者である。然し乍ら我が國史上の上代から中世への移行の事情と世界近世史が將に重大なる轉換期に逢著せんとしつゝある事實との間には、到底日を同じゆうして論すべからざる根本的相異點の存在する事は敢て論述するまでもない事である。

二、興亞の要諦

さて然らば、吾が一億國民が一致團結して乾坤一擲の大努力を傾倒しつゝある所の興亞の聖業とは如何なる目標の下に進められつゝあるのであるか？ これは極めて簡單明瞭である。曰く、第一には亞細亞をして亞細人の亞細亞たらしめよ。第二には興亞の原理及び實踐を以て世界を指導せよと言ふ事に盡きる。第一の問題は主として亞細亞に於ける政治的並びに經濟的現狀の改變を意味するものであつて、これに關しては問題そのものでは何等論議の餘地はなく、只だその實現の方法に關して研究の必要が認められるのみである。然し乍ら吾人は現在の所この問題を深く討議する資格も自由も持ち合はしてゐない。第二の問題に就いては、その原理の把握の上にも、これが實際問題への適用の上にも、容易ならぬ困難が伴ふて居るのである。亞細亞の興隆は近代歐羅巴の興隆と同じ轍を踏んではならない。吾人は亞細亞的にものを考へ、亞細亞的に生活する事を要求するけれど

も、それは偏狹排他的なものであつてはならない。現代の交通通信機關の存在は、世界の如何なる部分に於ても一國家又は民族の單獨孤立を許さない。世界各國は好むと好まざるとに拘はらず文字通り隣接し、相互依存の立場に置かれて在る。人間が平和を愛好し、幸福を願望するならば善隣友邦の道を執る事が絶對的に必要である。如何なる優秀なる民族も、如何なる絶大なる國家も、その優越を誇り、獨善を固守する事は許されないのである。近代西洋文明は世界の平和と人類の幸福に貢獻すべきであつたにも拘らず、どうした譯か、今は世界恐怖の源泉と化し、西洋人自身までがこれを嫌惡し危険視するに到つた。かくて今や西洋的な生活原理の放棄と新なる思想の發見とが眞劍に要求されつゝあるのである。

三、東洋の精神の根源

西洋没落の後に來るものはアメリカでもなければアフリカでもない。それは實に東洋でなくてはならない。何となれば、東洋は既に古代に於て世界無比の精神文明の建設に成功し、近世に入つてからは西洋の物質文明をも殆ど餘す所なく接取し盡したからである。吾人は我が日本民族が、その最も勝れたる兩文明の集大成者であり、より以上發展の責任遂行者である事を信じて疑はないものである。然らば東洋の精神とは如何る性質を有するものであるか？

東洋は國土及び文化の特色の異りに依つて、印度、支那、日本と三分して考察する事が便利であ

る。然し乍らこれ等の三者は、その發展の歴史に於て相互に交渉を持ち、影響し合つて居るばかりでなく、その出發點を全然等しくして居ると考へられる。私はこの三文明の共同出發點、換言するならば全東洋精神の根源は「無」にあると考へる。無とは何であるか？これは時間空間の中に在つて而もこれ等のものを超越した宇宙の一大生命である。これは内在的であると同時に超越的であり、普遍平等であると同時に特殊差別的である。その印度的名前は本性清淨心であり、支那流に呼ばば無名の大道であり、日本固有の言葉を以つて言へば「ことあげせぬ」日本精神である。言ふまでもなく無は單なる概念やアブリオリと呼ばれる様なものではない。生ける生命として吾人に體驗せられ、吾人と共に働くものである。「竹影塔を拂つて塵動せず、月潭底を穿つて水に痕無し。」これは無が現象的存在の間に作用して而も現象的存在を離れて居る事を自然の景物に托して言ひ表はしたものであらう。私は無とは宗教經驗に於けるパッシビティ(Passivity 受動性)の状態を言ふのであると思ふ。従つて無は凡ての宗教的生涯に於て經驗されるものであり、キリスト教者も亦佛教者と同じ無を経験する事はあり得べきであり、事實存在したと言へるであらう。聖フランシスは説教の中に、神を見んとする者は死人の如くならなくてはならない、と言ふ事を述べて居るが、これは禪の修行に於て、なり切れ、死に切れ、と言ふのと同じであり、分別の世界からパッシビティ即ち悟りの世界へ到る必要な心構へを示したものに外ならない。

若し無がキリスト教者に依つても理解されたとするならば、それが特に東洋精神の根源であると言はれるのは何故であるか？ その根據は當然東洋に發達した宗教及び文化の歴史の上に發見せられなければならない。實際一部のキリスト教者に依つては經驗せられ、舉揚せられた無が、どうして西洋社會には廣く普及しなかつたのであるかは、一個の興味ある研究題目ではあるが、吾人當面の問題とは自ら別個の問題であるから今は論及をさける。而して東洋の諸宗教及び一般文化の上に如何に廣く且つ深く無が普及されて居るかを一見しやう。佛教が無我を説き無心を理想とし、無住を尊ぶ事はあまりにも顯著なる事實である。又老子が道德經の冒頭に於て「道の道とすべきは常の道に非ず、名の名とすべきは常の名に非ず。無名は天地の始め、有名は萬物の母、故に常無欲以て其の妙を觀、常有欲以て其の微を觀る。此の兩者は出を同じふして名を異にす。同じくする之を玄と謂ふ。玄の又玄なるは衆妙の門なり。」と述べて居る事も有名な事である。儒教は多く政治 道德を論じて差別門の論に力を盡して居るが、然し中庸には「喜怒哀樂の未だ發せざる之を中と謂ひ、發して皆な節に中る之を和と謂ふ。中なる者は天下の大本なり。和なる者は天下の達道なり。」の説があり、又論語には「子、四つを絶つ、意なし、必なし、固なし、我なし。」の文字が見へる。我が國固有の神道に到つては他の諸宗教に見る様な教義に關する記録がないので、これを文献の上から論證する事は不可能であるが、實際信徒の心得として強調されて居るものは「明き淨き直き誠の心」

を以つて神と君と國民と人類とに事へて行と言ふ事である。而してこゝに言ふ誠の心とは佛教に言ふ無我、無心の心と一致し、道教の所謂無名の一物、儒教の説く中なるものと同じものである。次に文化の傾向を一瞥すると、印度の文學、繪畫、彫刻、建築等は概ね想像的であり、現世を超越した彼岸の世界を描出したものが大部分であり、優秀である。現實主義や快樂主義を表現した彫刻等が発見されない事はないが、それ等は印度文化としては劣惡な部類に屬するものである。エロテイシズムの故に可なり有名なエレファンタ窟院の彫刻も佛教主義のアヂャンターのそれに比すれば、その美術的價値は到底及ぶべくもない。而して印度思想の主流をなす解脱主義の文學や美術は外國人の目には全く空想的であり迷信的であつても、印度人自身に取つては何等怪しむに足らないものである。それは彼等の思索なり、鑑賞の基礎が無にあるが故である。「如來は説き給ふ。諸の心は皆非心なり。是を名づけて心となす。所以は如何？ 須菩提よ、過去心も不可得なり、現在心も不可得なり、未來心も不可得なればなり。」（金剛經第十八）この様な所説は大乘佛教、特に般若經典に於ては隨所に見出される所であるが、これは現象の世界を單なる現象としてのみ見ず、無の經驗を通して現實世界を眺める時にのみ正當に理解される事である。この無を通して現象の世界を見て行くと云ふ生活態度は支那にも日本にも古くから實行されて居つた。その事を最もよく立證する言葉は「幽玄」又は「寂び」であると私は思ふ。勿論これ等の言葉が廣く社會に用ひられる

様になつたのは、日本に於ては佛教渡來後、特に平安朝以後の事に屬するが、然し斯ふした言葉が非常な勢を以つて廣く一般化した理由は、我々日本人が昔からこの言葉に相當するものを生活の中に持つて居つたが爲である。そしてそれが佛教の渡來に依つて大いに刺戟されたと同時に、又一面外來の思想そのものをも日本人の生活體驗を通して或は改革し或は深く掘り下げたのである。中世以後明治維新までの日本文化が殆ど全部禪の影響を受けて居る事は顯著なる事實であるが、この事は又直ちに、日本文化の基調をなすものは幽玄であり、寂びであると言ひ換へる事が出来る。例へば、日本固有の和歌に於てさる藤原俊成卿の千載集（一八四七撰）前後より幽玄調（達磨宗とも呼ばれた）なるものが擡頭して居る。その外武士道、茶道、繪畫その他を通して、風流を尊び、さびを樂しむのは日本上下の通風となり、禪味なく、茶味なき人は共に語るに足らずとさる信ぜられる様になつたのである。この様な生活態度と言ふものは、自我や所有の觀念に執着して居ては出て來るものではない。どうしてもそこに何か一種特別な經驗の源泉がなくてはならない。これを私は無の體驗であると見るのである。

四、無の世界性

東洋精神の基調が無であると言ふ事が一應承認せられたとして、無は果して今後世界精神の中心として發展する可能性ありやを検討する必要がある。無が全宇宙の生命であり、一切所に遍在し、

而も如何なる現象的存在とも衝突するものでない事は既に述べた所である。即ち無が理として世界指導の基本となり得る事は己に論じ盡されたのである。依つて今は無が事として如何に世界の一切と調和し得るか、換言すれば東洋に於ける無の發展の歴史が如何に廣く異つた民族國土の上に普及されたかを考察すれば足りるのである。然し乍ら、これに關して東洋の歴史を回顧する以前に西洋の歴史を一瞥する事は多大の參考となるであらう。

キリストが世に出てからまだ二千年に滿たない。然るに今日キリスト教の興隆して居る西洋に在つては、キリスト教以前の土着の宗教に就いては殆ど知る所がない。英、佛、獨、伊は勿論、スペインにもオランダにも乃至北歐の諸國にもキリスト教傳播以前に何等かの宗教或は民族信仰が存在したに相違ない事は何人も疑はぬ所である。而もそれ等は今日何等の痕跡を止めぬほどに抹殺されてしまつて居る。それはどうした譯であるか？これに就いては種々なる原因が數へ得られるであらうが、キリスト教の偏狹なる排他性がそこに大きな役割を演じてゐるのではなからうかと私は考へる。これは歐羅巴に於てだけでなく東洋に於てもその片鱗を現はして居る所である。キリスト教徒に取つては、佛教、儒教、神道は勿論、一切の異教は邪教であり、神の尊嚴を信じない不都合な存在である。そればかりではない、同じキリスト教徒の間に於ても、カトリックとプロテスタントとの間では互ひに異端邪説として排斥し合ふ事恰かも仇敵の如くである。一般に宗教には包容性と

排他性と二つの矛盾した傾向がある様である。然し乍らキリスト教の如く異教徒を仇敵し、迫害を敢て行ふ宗教は稀である。近來西洋人の東洋研究には可なり眞面目なものもあるが、今から數十年前の西洋人の佛教觀などには甚だ見當外れのが少くなかつた。これは主として初期の西洋人佛教研究者がキリスト教の宣教師であり、従つて故意に偏見を以つて佛教を西洋に紹介したが爲であると言つて居る西洋人がある。キリスト教は、他の世界的倫理的宗教と同じ様に、「汝の隣人を愛せよ。」とか「イエスの教は全人類の救ひである」とか言ふ宣傳はするけれども、これを二千年のキリスト教傳道史に徴して見ると、それは驚く可き殘忍なる血を以つて塗られた、異教徒又は異人種征服の歴史である。

これを少しく佛教東漸の歴史と比較して見よ。佛教は印度に興り西域を経て支那、朝鮮に擴り、更に我が日本にも傳つた。その間凡そ二千五百年、到る所多大の成功を收めて自己の宗教を以つて人心を滋育した一方、その土地々々に於ける在來の宗教信仰をも啓發しその發展に貢獻した。例へば支那儒教に關して宋明性理の學を大成せしめたものは禪佛教であつた。日本に於ても中世に於て儒教の命脈を護持したのは五山の禪僧であつた。又神道が教義を組織するに當つて多く取り入れた所のは佛教の哲學であつた。而して明治の神佛分離以前に於て多年の間神社を直接管理し、繁榮せしめた者も佛教僧侶であつた。その間多少の論議や不和が佛教と他宗教との間に存在したにし

ても、それは極めて輕微なものであり、佛教が宗教宣布の爲に流血の慘事を惹起した事は全くない事である。これ等は佛教本來の立場からすれば當然の事であるが、これを他宗教の歴史と比較する時には實に注目し値する事柄である。この佛教傳播の歴史を以つてしても、無の基礎の上に立つものが如何に平和的であり、協調的であるかは立證せられる。無が理に於ても事に於ても將來世界精神の根本として活躍し得るものである事は何等疑の餘地はない。

五、禪宗文學の特色

東洋精神の根源が無であり、これが理に於ても事に於ても世界指導の原理となり得る事以上の如くでありとすれば、興亞の指導精神は無の再興になくはならない。而してこの無は萬人の生命の中を流れて居るものではあるが、人々がこれを發見しない限り充分に活動はしない。この無を發見するには、人々は學問又は宗教に依る精神の修養鍛鍊を必要とする。而して無の修得上、支那日本を通じて最も顯著な貢獻をして來たものは禪佛教である。この事は支那及び日本の文化史を一瞥すれば明白である。

然らば禪とは何であるか？ それ甚だ大いなる問題であつて小論の能く盡す所ではない故に、こゝには禪宗文學の特色に就いて卑見の一端を述べる程度に止めやう。

凡そ宗教の文獻は、キリスト教と言はず、佛教と言はず、各々の宗教的見地に立つて宇宙世界の

生成に關し、或は國家社會の倫理道德を關して述べたものが大部分である。これを量の上から論ずるならば、宗教の本質たる宗教經驗に關して述べた記録の甚だ僅少なるは寧ろ驚く可き程である。更にこの僅少なる宗教經驗の記録中に在つても、最初の經驗に到るまでの道程に就いて語つたものが大部分であつて、一度經驗を把握したもの、その後の心的過程に就いて語つたものは甚だ稀である。従つて我々は、人が如何にして佛又は神に成るかの順序過程に就いては多少聞く事が出来るのであるが、さて佛又は神となりて後は如何と聞かうとすれば、全く失望する外はない。キリスト教の如きは元來人間が神になる事を許さない宗教であるが、それでも神秘主義一派に於ては神人の合一を経験した人々の記録を傳へて居る。禪以外の佛教諸派に在つても、淨土教の指方立相を始め各宗各派それ／＼往生或は成佛の道を説いて居る。然し乍らさて神を見、佛を看たる後は如何にすべきか？ 禪の語を以つて言ふならば、身心脱落、脱落身心の後、百尺竿頭如何に歩を進めるか、有佛の處遨遊することを用ひず、無佛の所急に通過しなくてはならぬが、さて何處に落ちつくのであるか？ この疑問に答へる宗教文献は果して幾許あるであらうか？

禪の語録は未到底の容易に味讀し得るものではないが、管見を以つてすれば、禪の文字は概ね見性成佛の所より始まつて居る。假に他宗教に於けるこの種の文献を、宗教經驗に到達するまでの上昇過程の記録であるとすれば、禪の語録は、その昇りつめた所から出發する下向の名所案内記だと

言ひ得るであらう。勿論禪者はそれを以つて向上の事と呼んで居るけれども、これは同時に下向の道だとも言ひ得るであらう。東坡に従へば、この下向の道中「到り得て歸り來れば別事なし」と言ふが、この別事なき消息が實は禪の全財産なのである。而もその「一段の風光畫けども成らず。」と言ひ乍ら、否その説くに説けない所から、祖師方は自由自在の説明をして居られる。これが即ち不立文字の禪家に於ける汗牛充棟も只ならぬ語錄文學である。

興亞の大業が畢竟興無の展開であるべきであるとすれば、語錄の一般社會への普及の如きは、差し當り手近い、且つ有効な實踐條項の一つであらう。敢て識者の一考を煩はす所以である。(完)

(昭和十四年八月十八日記)